

『上にあるものを求めなさい』

コロサイ人への手紙3章1節

はじめに

いよいよ最後の聖会となりました。今回の聖会ではコロサイの信徒への手紙3章1節、「上にあるものを求めなさい」との御言葉に耳を傾けてまいります。愛する皆さまと諸教会に主の豊かな祝福がありますように。

1. 上にあるものを求めなさい

3章1節、2節。「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい」。1節の「さて」は、むしろ「こういうわけで」と、これまで語られて来たことを受け、今すでに私たちに与えられている恵みの事実に基づいて、ここから具体的な信仰者の生き方の問題を論じているとする言葉です。この1節の表現は、元の文章では2章20節の「あなたがたは、キリストと共に死んで、世を支配する諸霊とは何の関係もないのなら」と並行した書き方がされていて、「もし、あなたがたがキリストと共に復活させられたのなら」という文章なのですが、しかしその意味するところは推量の「もし」でなく、この1節が訳すように「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから」という事実の強調です。そしてその前提となるのは、すでに学んだ2章6節の「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい」、2章12節の「洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです」との御言葉にありました。ですから1節の原文にある「もし」は、むしろ新共同訳のように読むのがふさわしいのです。「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい」。ここでパウロが「上にあるもの」と言うとき、それが意味するのは、主イエス・キリストにある天の御国の祝福であり、永遠の命の希望であり、何よりもその希望の中心であるキリストご自身のことと言ってよいでしょう。地上にあるやがて過ぎ去り、朽ちていくものに希望を置く人生でなく、朽ちることのない永遠の希望なるイエス・キリストに今、自分自身を結びつけて、この方とともに生きることです。なぜなら3節、4節に「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう」とあるように、私たちはすでに古い人に死に、新しい人としてキリストとともに生きる者とされ、キリストとともに天の御国を目指し、やがて再びキリストが来られて私たちを迎え入れてくださる栄光のゴールを目指す道を歩み始めているからなのです。

この大きな生の転換について、たとえばローマ書6章1節から16節で語られていることとよく読み比べ、自分自身の姿に照らしてみたいと思います。本当の意味でキリストの十字架の贖いが分らないと、上にあるものを求めて生きる生のリアリティーは生まれてはきません。キリストの十字架によって示された神の愛のリアリティーが、私たちをこのキリストを求めて生きる生へと導くのです。そこで改めて、私たちの罪のために、いやこの私の罪のためにキリストは死んでくださったということを私たちはどれほど真剣に受け取っているかと問いかけたいと思います。父なる神は私たちの罪を見過ごしにされるお方ではありません。ですから私たちの罪は神がそのまま水に流したり、私たちへの裁きをあいまいにされたのではない。その裁きは確かに下されたのです。けれどもその裁きは私の上ではなく、神の御子イエス・キリストの上になされました。そし

て罪なき御子が、罪の中に死んでいる私たちのために、自らその罪を負い、父なる神に捨てられるという、私たちには想像もつかないような苦しみを担って贖いを成し遂げてくださったのです。今、よみがえられて天に挙げられ、父なる神の右におられるキリストはそういう苦しみを経ておられるお方であることを心に刻んでおきたいと思うのです。その愛で愛されてしまったら、その愛に応えて生きざるを得ない。愛とはそのように相手を呼び起こす力、応答を呼び起こす力です。神の愛を受け取ったら、ただもらいっぱなしでは終われないはずなのです。それなのに、キリストを求めることなく、もらうものだけもらって、恵みの上にあぐらをかいているような生き方のまま、何も変わらないということであることができるでしょうか。この問いとあらためてしっかりと向き合いたいのです。

2. キリストと共に

パウロが私たちに「上にあるものを求めて生きよ」と命じる根拠は3節、4節にあると言いました。終わりの時を知る者だからこそ、というわけです。終わりを覚えて今を生きる。これは信仰者に与えられた大切な新しい生き方、新しいものさしです。すべてのことに完成が与えられる終わりの時を知り、その時をリアルに覚えながら終末的な生の中に生き始める時、すでに今私が生かされている地上における生き方にも大きな変革が生まれてくるでしょう。そこでは第一に、時の感覚が鋭くなります。今のこの時がどういう意味を持つ時か、どういう価値を持つ時か、それを知ることで無駄に空しく時を浪費する生き方からの変化が起こってくるはずです。第二に、自覚的で決断的な生き方へと変えられていきます。今自分がしようとしているこのことの意味は何か。なぜ自分はこのことをするのか、しないのか。なぜこれを選ぶのか、選ばないのか。そういう一つ一つの事柄の本質的な問いを自分に問うようになり、それに対しての決断を迫られるようになるはずです。第三に、生きることへの丁寧さ、誠実さが生まれてきます。与えられた人生、与えられた時、生かされている命。その価値にふさわしくキリストにあって生きること、そこにある楽しみも苦しみも、喜びも悲しみも、それらをまらんとキリストが私に下さった人生として受け取り、それを黙々と担って愚直に生きる人生へと変えられていくはずです。そしてこのような終末的な生き方は、こちら側から押し出されていく生き方というよりも、あちら側から、終わりの方から、上なるお方によって引っ張られるようにして、希望と約束の中に導かれていく生き方なのだとことを覚えておきたいと思います。

さらにパウロは、上にあるものを求めて生きる人のアイデンティティーを「新しい人を着る」と表現します。古い人から新しい人への転換をパウロは「着る」という言葉で言い表すのです。まず5節から7節ではかつての古い人の姿が描かれます。「だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました」。それに対して8節から10節では今の新しい人を着た姿が描き出されます。「今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです」。ここには教理の言葉で言えば「義認の一回性」と「聖化の継続性」の問題が再び登場しています。それは言い換えれば神の御前で立場と状態といってもよいことです。「義認」というのは罪ある私たちがキリストの贖いによって神から義と認められるということですが、それをパウロは「新しい人を着る」と言うのです。義と認められるというのは、私の神の御前で立場の変化のことであり、私の状態が義なる者になるというのではなく、相変わらず状態としては私たちの存在には古い人の罪がこびりつき、それとの戦いは日々あるのだけれど、神がキリストの勝ち取ってくださった義の衣、新しい人という上着を着せてくださって、あなたは私の前に正しい者だと認めてくださっているということです。しかしそれで終わりではない。今度はそう

やって着せていただいた「新しい人」という上着にふさわしい者になるために、私の状態そのものも変えられていき、「新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされる」という歩みが始まっていくのです。これが実際に私という存在が聖なる者とされていく「聖化」の歩みであり、それは徐々に徐々に、少しずつ少しずつ、という生涯かけてのプロセスの中で成し遂げられていき、ついには終わりの時、4節で「あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れる」という救いの完成、ゴールの時、私たちも栄光の姿に変えられる「栄化」の時に至るのです。

このように救いの全体像を見渡した時、あらためて私たちに与えられている新しい人としての生き方の地平の広さ、豊かさ、大きさというものを思います。そこから翻って、私たちはなおも地上のものを求め、すでに死んだはずの自分にいつまでもとどまり続けてはいないでしょうか。すでに捨てたはずの罪に捕らわれ続けてはいないでしょうか。すでに捧げたはずのものにいつまでも未練を残してはいないでしょうか。すでに向きは変えられているのです。そのことに私たちの現実の生活がしっかりと転換していくように、もう一度主イエス・キリストの御前に自らを見つめ、悔い改めをもって新しく歩み出したいと思います。

3. 新しい人を身に着け

こうしてパウロは新しい人を着た私たちの「上にあるものを求めて」生きる新しい生き方を、「戒め」と「勧め」として語ります。12節から17節。「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父なる神に感謝しなさい」。

本来ならここに示された一つ一つを細かく吟味しておきたいところですが、ここではこのパウロの勧めを大きく「愛と平和に生きる」という言葉でまとめておきたいと思います。キリストにある新しい命に生かされ、真の自由の道を、上にあるものを求めて生きる人の、この地上における具体的な生をパウロは愛と平和に生きる生き様として示すのです。私たちはこれまで、キリストにある者の人生のリアリティーを福音の喜び、真の自由の中に見いだしてきました。しかしそれが単に自分を喜ばせるだけの喜び、自分を楽しませるだけの自由で終始しているとするならば、そのような生き方をあらためて見極めて吟味することが必要でしょう。その際に、パウロがガラテヤ書5章13節で語った次の御言葉が重要になってきます。「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい」。「上にあるもの」を求めて生きていく時、自由の用い方が変わってくるのです。それは愛に基づく自由、互いのための自由、仕え合うための自由、分け与えるための自由、そのためには時に自らを不自由さの中に縛り付けることや苦難の中に身を置くことさえもいとわない自由ということなのです。

この自由の問題をもっとも端的に論じたのは、宗教改革者ルターの著した『キリスト者の自由』という書物です。そこでルターは有名な二つの命題を掲げています。それは「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、誰にも服しない」ということと、「キリスト者はすべてのものに仕える僕であって、誰にでも服する」ということでした。私たちは与えられた自由をどのように用いるのでしょうか。上にあるものを求めるとい方向性の中で、愛と平和、真の喜びと自由の人生のために用いるのでしょうか。それとも今なお地上にあるものを求めて、自分の欲や偽りの楽しみ、罪に縛られた人生のために用いるのでしょうか。パウロはピリ

ピ2章21節でこう言っています。「だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません」。これは大変鋭く私たちの心の奥底に突き刺す御言葉です。「そんなことはない」とすぐに打ち消したいけれど、「いや自分だって」と反論したいけれど、しかし本当のところはどうなのか、と問いかけられた時に深く自らを省みずにはおれない、そういう御言葉です。

おわりに

上にあるものを求めよ。この御言葉を聞くと、私は主イエスに招かれ、召され、従って生きた弟子たちの生き様、そしてパウロの生き方を思います。「上にあるものを求めよ」と語るパウロ自身の生き様がまさしくそのものであったのではないのでしょうか。地上のものを求めて生きようと思えば十分に生きられたはずですが、しかし彼らはそうは生きなかった。いや生きられなかった。主イエスを知ったときに、そのような人生には戻れなかった。いったい彼らは地上で何を得たのでしょうか。ほとんど何も得ていない。むしろ苦しみ、迫害、殉教です。それでも彼らは主に従うことをやめなかった。古い自分には戻らなかった。それはもっとすばらしいものを得たからであり、十字架の愛で愛されてしまったからなのです。

私たちはもっともっと真剣にキリスト・イエスを求めていきたい。もっともっと真剣に上にあるものを求めたい。もっともっと真剣に主イエス・キリストに従うものとして生きる者でありたい。十字架の主イエス・キリストの愛に突き動かされるようにして歩んでいきたい。このキリストのために生きるという新しい決断をここで与えられたいと願います。